

総合的な学習の時間における高齢者学習の展開

—徳島県における高齢者居住の実態調査に基づいて—

○吉田 亜希子* 金 貞均** (*鳴門教育大・院 **鳴門教育大)

【目的】近年、日本は世界未踏の超高齢社会を目前にし、高齢者福祉に関して早急な対応が求められている。これまでの福祉は「住宅」を抜きにして取り組まれてきたが、これからは、「住まいは福祉の基礎である」という居住福祉の視点に立って高齢者福祉のあり方を考えると共に、高齢者の生活を社会全体で支えていく体制づくりが必要である。本研究では、学校教育における高齢者学習の意味を地域社会の担い手の育成という視点から捉え、徳島県における高齢者居住の基礎資料に基づいた学習の展開を試みた。なお、新学習指導要領により新設された「総合的な学習の時間」に高齢者学習を位置づけた。

【方法】徳島県における高齢者の居住実態を明らかにし、地域の基礎資料を得る目的で調査(町村部4、市部3)を行い、その結果に基づいて高齢者学習のカリキュラムを提案した。

【結果】分析の結果、①徳島県は既に超高齢社会を迎え、過疎地域では高齢化率が40%を超える地域もある。②高齢者福祉対策はサービスに地域格差がある一方、住宅政策は十分に機能していない。③高齢・過疎地域の高齢者世帯は子世帯と日常生活援助や交流ができない距離に居住しているケースが多く、近くに住む親族や近隣、地域施設の存在が高齢者の生活に重要な役割を担っている。④ほとんどの高齢者が現住地での定住志向を持っている、という現状が分かった。これらの結果に基づいて、(ア)社会の現状と地域環境、(イ)高齢者や他者への理解、(ウ)人にやさしい住まいやまちづくり、(エ)介護や福祉制度のあり方、(オ)これからの自分の活動、の5つの柱を立て、児童・生徒が地域の実態を理解し、地域の一員としての役割を認識することに主眼を置いた高齢者学習のカリキュラムを提案した。